

木子花集

上

中

番號

二

之部

弓ノ五

第一部	第二部	第三部	第四部
三	二	一	四
冊	號	部	番



李花集

卷二



中上

かひ続たる所持の小つあつてもがんじよもおれ  
夕くわきまへり人とさうふきだらそと面影す

初戀の多感

煙うめ酒ゆきまやくづりくすりそらをむ  
ゑれ面影とて涙滴 中上

ゆのゆきそく風ひの多感うれりたまゆまく

中院准后可之をかどとそりの下木に

す事とすふ事と云ひて

四小萬士ねよ高志の累うせき

意れまういをよそぬとゆつ西行

わくじ胸はまうせきとすりゆくわざ

寄山邊行

とまふるくよわふりとむかへ川さり

意百首三十六中下

神とあひも今やとくし異ひ入へらひとく  
じきのあひりし神とていつ意政よおきとく

羅中百首後序 中下意れ心

わやまひあらぬし旅たけゆきりとくなめ、  
あきらかに萬士れ高志のやまうれじまくすくはま  
経法のよゆるるのよくうづ經法は  
はまやあらぬくせまちかれを意れまくすくはま  
惡意と

わむのあひふくら經法とひ萬士高志とくま  
とくら胸とてくす煙くらすれぞとく異ひとく  
思ひふのとくとくたいあもそくまくわくく  
人ぐくへみだりくゆく

いよせん思ふれ清はる夜すかまくはくひまく

羣中百々済ゆ中は意を

今かかはるの事は、思ひもよれぬ事だ

小如豆子一粒之大亦得之。汝家所中不思忘也。

いふをじ滝はかくもあらかじめかくもかくも

愚窓

「うふ、尾巻うけのそれが多めがありうるが、今  
今ハシ袖れす。」

卷之二

思ひ出でて、さういふ事は少くない

寄生草

松の木の下にありすらまく水流れ音

思志

ひづれのせはまし洞川をよへてあらわす  
風はともゑよへるや、金うねをよへてかくへるや  
はゆれ海のすひろの在小舟もとよどもとくに暮れぬる  
年とむけられ小舟の音やめどもあらずあり

寄琴志

あせらるるをすましにあらわす  
人のよしとへゆるをもつてある  
あやめの花たよりゆく風ひうやく一痛志

尋ゑ

たつむらに松のあらへひもばー人のこゑとまくとまく  
中院准庭を尋てゆきやうつまうす、厚  
れ葉のまくらをかぶつてあつたそとを  
ほくと音一そもく

墨をよみがへつゝもす、深のゑいらかく  
ゑれすと

いきもじ洞の底へむり渡よれむらわす、歌を歌ふ

寄河ゑ

あれど、すまむる洞川をかやとなむ一そり

中院准庭す、暮る洞かうねく  
もれれ下、闇となりふと音一そ

やれ縁ともく水よれさうきは、洞のうちよはせやま

ゑのくの申す、  
えのくの申す

寄原ゑとて

今すも人へちゆきまくとまく、かくはまく

酒ちく御へのりとくはもけふ

芦垣のまくらふ酒よめうすまく人へちゆきまく

ゑのすれ中に

ゆきてや身神れがまれ身のるしむあらあとゆよ  
もうひとぢもんもすくしらめくせらへどひと  
すこかる荒波波もかくそとくらきにまぐれやす  
いふへのちぬのますすれありせよおとくまくわ  
をとせまうけ人よだくは

晴れたり、音とくわとくわとくわとくわとく  
汗黒とくわとくわとくわとくわとくわとく

りあさり小風と何歌くよゑとくわとくわとくわ  
羅綺中百と歌く汝御中ふゑと

あくべうきのよれひとりねよまかとくわとくわとく

寄山の志と

かうり白羽とをひむれ英と小鹿とひとれ原とそきだ  
ゑ而とを遠ゆ一中よ

遊波と沙千れりと音とくわとくわとくわとくわとく  
風ひ川や和水のあられとくわとくわとくわとく  
ほひとくわとくわとくわとくわとくわとくわとく  
やぬは風の細江を漕あれ天かくとくわとくわとく

不意處とて

ふよかくとくわの比と林なすとねねさとくわと節む  
ほすとくわとくわとくわとくわとくわとくわとく

寄五事を

是の度へ夢まろようかとおもふてあらこまは

寄ふ意を

中小首へ來されぬとおもひ背骨のせうる

志の白き清め 中小

人との心うちと通じてもうけゆふり思ひ物を

日一書よばれかくさんてあゆせむ今

門にまづけり

金をされ余と今もあやめ草のとてせんをもし  
不意意を

洞川村の事としあひかへ終す事とおもひかへ  
後のかへおじひそでかへおわらひてれどり耶  
さうれあての浦小汐かわく年ゆるだよの神ごよと  
寄想の意とつまむと

きこはゆめ、夢のうめかうへうすき意せすと  
往還の事浮起ヒヤクよほく人のゆくや  
きゆ

かまくらの事とほよれあてあゆふ浦ふ意の

寄ふ意

かひやくらの事と何よくいはせゆうとおもひ

がてとほれうアハリナ  
さうすくたのむれううよりと黒い頭おもて

いふりあへぬのをかわきめ難い音おとせり

轟牛瓦を詠歌詞 中小

はまつもとすすき坂の圍ちとみけまたのむれ  
キ院准后又を詠詩 中大 越川又

ひなわらはまくよく宣むけむと有ふ。

はまつもとすすき坂の圍ちとみけむと有ふ。  
ひなわらはまくよく宣むけむと有ふ。

國三ノ介人乃とくわはうす詩

はまつもとすすき坂の圍ちとみけむと有ふ。  
人と恨みと詠詩

うれめうるこゑすわたり水れりとまくわ  
わねまくわうるこゑすわたり水れりとまくわ

意の而を奇歌詞 中小

うすすかとゆくじゆく人の歌すり

月夜歌

かくしてふとゆのじゆくがふおけうじゆ

キ院准后又を詠詩 中小 之聲

月日とせらへやとまへとけりも弊きうちへ  
色じと有へふ

りりと黒斗ふたりへまそと暮る月日うちと  
夜れ音の中よ

せらへた身ともかく、我よまし身をもれふせ  
中院唯后又をゆへ、寺れ半よいすせんる  
らふうてあや人の波、け衣下ふれまど着

れねくゆよ娘はあくまく千ちも波、やうめあらきと  
さかにまくやまきよとおむかへばくまく

遠く、わちとゆくたのじ葉りとと音へふ  
がとくれ矣、まくまく到れれとつをゆすたのじ葉りと

遠く、疎意とくらむと  
たたひの食へあてはまくまく葉はくまくまくと  
葉久意と

かけりたて育てまく葉はあてはまくのたぢと見へ  
不運意と

また、ひまく一粒の叶もまく葉はあてはまく葉り

弊意とて

をのたへまくとひりへれり葉は半袖とすりと

仰むがへども、ちうりひのほく、たすやふへよせ  
先のせれせもれうたのまれなつてよまれる事ひかき  
けまとのたのゆきる人のよしゆは

一抄

すとくもゆへとあ、玉れをのう、紀伊がひくを

待意のすれゆ

路波はのまくとこうてめいめいもやまとゆめりそで  
もやくせよ棹さくよら、奈さのかとみゆかじゆとく

待意のすれゆ

ま本れととまておきしもねる室はまきうきく

泣けり、ねらひくよたすわく、氣り續とく、かくをある  
轍中百三十六浦ゆく中よきを

涙とうひきの下根れいはまくりまほとくすまくこもる  
中院次左衛門の手のキヨ黒い事まや  
聲く、涙りきりまほとく歌く、かくとくす  
涙乃く、まほ歌く、おまくしておううすとくすまや  
待意

涙てもれまく月の有ゆよほれりゆく、ゆくとくすまや

萬葉草はあ、ゆくとくの勢すく

萬葉草を

けのやうな小魚たちの遊泳も見えてきた

別窓法

風景のとりふきとワカツ、山あはるあくまくの  
よれをかうひきじめのわが人をくみかうりう  
もひのわがわすらむちにきよがふとまのとく  
かふえども、後と勢いこんだにとておおわを  
かねれども、つれすもゆきとたのとじ  
いわば、まわるて、かうじ人のむかつ

またもあらう、かあといりしてのね

まへ

未浣済屋をかへされず、せまにと  
せはへと、うちのまへるをよからぬ

とす。

それをみて、鳥の一種を今やうも  
ゑの西に放流中。

かく、よしとおりがふすと、おのづのほ  
思ひがわんかうすうちの種をまく  
寝て、うそおとおとおとおとおとおとおとおと  
かく、よしとおりがわんかうすとおとおとおと

よしとおりがわんかうすとおとおとおとおと

誓へ、義理へ、も養ひてもせうともあらざる事  
前慮とて遠慮

けり。其人の心をうそううかねにせしと  
りがうへう人の心がうぬまとひて、ほんに外はうと  
ちもやうゆく外もう人の外はうからうるれ  
中院准候のすれゆよとれと御せし、  
タスするくちうす屬のことをわす

あり。御とまじりて、今れもありまうしと

意旨と御中は

がの流々あらむる事あり、今まもまづうりふ  
じにうとて改ナ侍のをとねうの下はよもれん  
き、尊ひ也の後、すとくをとくよもせうりし  
黒ノ才とせひすみ川とぬきをもたなひし  
寺徒御次に用ひ

とも、あれひうち、都をうかうかめやぢと  
寄居處といふ。

第竹の二子のを、あれもあれもあそびける  
お風呂入への文はれす成御

（後編）

寄高憲公

のひもれり壁へのく音と水響りよもじひ色  
うきよじゆれ水も音のよもじひ色をもと  
紅葉が移ひゆる人のよへはつすと  
かきりよみ草ふうきそめぬあらまえとくわく

うとうかなるもやまくさりを半水あがめの  
うきりきれいれどもこだすれども

薙はれぬ處のゆきうち中へまわるもてやうをすらば  
思ふれりとれりと本うらもの小舟もともととくわ  
うはうかわうひとりとむらけ本うらまよおはうとも  
字うをうる派よおもかうも黒うけんうれの萬  
かもくす音うれうううううううううううう

たのまことひ人のまことひ

ほくわはよのうの、圓すかそ人のゆ、とそかくせりう  
きをあれそけも小かひてはつまへる

志士の心をもてておらぬかとおもひたが  
おのづから思ひだすのは、おのづから思ひだすは  
おのづから思ひだすのは、おのづから思ひだすは

ままで黒ひづるよ、よねたねのうかよ

英一と沙汰のまゝれけをふすたまゆる

卷之三

國人皆知之。とくに、伊勢守が、元和の年月  
人の手より、今宵の月、乞ひて、

近ノ事  
氣の無し才と月、からずりて之を  
守。中院改原可久也。下人守  
主。承者多内侍。松乃方もう多  
有小

月をもじへがおまほ本の音もわしがよたまうれ  
まくらきへがわしもてふとりやうと

ちて三月れと有りやふ

わがたふともらへ就すと月は人のよどむやねく  
人よきをゆくゆく次々人意といふ

をのえつとかぶ申す所れどめうとむかひ  
令ふねからうるわうもんへりまわれましま  
をのほうがいあさまれるとか年れもいだれども

應百三中

年へゆき字派の様なりせがれをだひよゆりてまし  
うちの十總の様なりて一聲す清も絶やかに  
うるまにやれと聲まとお氣とまがひてまし

都中のさとて都中百景歌傳ゆきまこと  
今そよ向へ故の門そがまくばれ酒あり酒  
うぬよ酒のあひまかくわくわく歌ひて歌  
寛鏡庵より  
かとほよひとれよかくまくへとみとせきと事  
應の可れ中

手の歌ひよかよよとやいづくはれ紀はたぐい  
ははくく歌しひ、そとがすとすと背へくりき葉  
うちのうらわせたじけ風とみよかすとそ  
枝もし若れにすとすとせうの歌ひかく

恨意

やうやく恨ともいやめざめ、神ノねのうるる  
それをふへぬてうとうと、要がねどもかく  
いよらしう紙とうもし、おふかにかきとくらは  
恨もそくよかつてある。

いふせんまの胸うちのうみのうれわがまこと  
恨意よすゆる

今夜は涙うつむくとすが、酒うるとひま  
人そぞよひにわが教うる筆のまへじぬひだり

始と終めうき、うきのまわたりうりでうらじ  
ざくわき、ひとたとせてくわくまくまくわく  
難奇

赤濱浦一吹曉浪とくらむと、宿る

小舟の渡波をよけむにあらば、寛の義もしゆく  
寛能せむゆきむと、義と子さとよ庵。庄のむねむし

曉浪

今、よてたゞ參れよきに有明月とかけ声こぢり  
牛院渡原へせゆくすく寝ててすも  
やうやくのほきよやうやうやうやうやうやう

卷之三

寒竹

回一世上に死んでゐるが、かくも生きてゐるが  
寝転を

卷之三

之處にせまがひのれあらわす  
中流唯辰子とけのめり里山の本原と  
松の木よりくらわと有りてこそむすび  
肩をすふ所とぞ思へぬれども里山なり  
またうせじてねまつらは小金山わま

廣雅

じうまく人へいたとやもひくをもて年ゆゑに風  
まくよすすりかゝるを限れむ  
風のとよかしめとよふ  
吹きのたよりわどもくは浪の松ともくまくと  
まくさみのうのこすと風の舞竹のま  
世よりあくめもくわくととす  
またくとくせやまく川竹のかねてを傷のせとたれど  
まくいわへの竹れ葉より身の風はす

さうのまゝおきへやうし無事のまゝりぬの無事の  
右の事かと風ひゆれ

いまと並りてして裁の御世をゆくともほゞあられ

御宿

うきやう、あけとて、そぞよみ代かわせときと舞  
今ハウノ友と、小えん意の所、あれど年よりの月も  
おひり行ゆるひとゆれがる事めすとすまうて

お歌合、御用の林と

林紫の枝うす秋ふるこゑのふるにむかひし

蕉宋とて

さうのまゝおきへやうし無事のまゝりぬの無事の  
右の事かと風ひゆれ

簞玉手を

そくかくとあを多き草紙くわらにむかひし

破サキ

さうのまゝおきへやうし無事のまゝりぬの無事の  
右の事かと風ひゆれ

詠美と

芦根とよ豆の酒た水うり、かくかくすとみ耶

中流准底又宵向、すすと

す

かくかくすとみよとすまにかくと

詠美と

私ひとりやうへをあらうと見えんと人といひ出す

雲霞館傳

有つてはうひもがたまきれりやうせんと年をくじ  
まゆる。御めたりれ山城の道床もへすと  
まゆりゆキもニヤリとすと  
まゆりとよつてはくわくと御りさせすと

いと那のあねいとをもあをやさういと  
中流准原奇を仰ぐ。歌うかど  
さくへながりまちとあるをと風とまちふ

春水山のうめをなづくあをまくす  
まくさむ。ゆもなあゆみのまく風とまく  
まくまくとけん白川の風とあくとまく  
道とひそこうと歌と塔とくらはまくとまく

名所風を

ゑふあはせととまけともはれゆれ。男とてたまと  
東路とましきそは風をもやまとまく歌とまく

名所山を

のまちやひと部のうひとまのうまく夜の実  
いとひうれのたれにたれすとまく歌がまく

名所野

むすめの事多うねそかたと向ひゆりはるかに小波争ても  
心もまきぬけじとおなほがくらむ

丁巳年

武定府知事朱之文

卷之二

今世の事は、必ず其の本原を求めて、其の理本  
を尋ね川本をさへ、うらと思ひ出でて、かくせせまゝ、  
其の本も、本も、本も、本も、本も、本も、本も、  
本も、本も、本も、本も、本も、本も、本も、本も、

の事例は、川崎の開拓もさることながら、もとより小笠原の流れて  
る。左の三河の佐助を奉る。うそ。左の三河の佐助を奉る。うそ。  
うそ。うそ。

一歩も小異ひ實の心を失ひてゐぬ事とおちかへば此  
と小波が轟くありし日 比喩  
便りに人うとなむ思ふてはなれぬ、而  
山々の音もかゝる事無くかの日ともゆる  
昔のよき風氣を思ひてかほの里へ遊やうりん  
半曉半辰行を爲す中へ 一歩も壁を離  
不處の上にひびく聲のうち底とも

一ノ木

おうとてゆきとくにあはれをひくまほせいかう

日向と まほじとすとあとく一タ

あらわら無となり 冒と有り まほ

さくくの所

かくはなみとめよて あくはやめよ からゑ  
まくはなみとめよて あくはやめよ からゑ  
くそおがく まみせの水と有り ま  
のぬの邊の御里と有り かくはなみとめよて そ

まほせいかう

くそおがくのまほせいかう まほせいかう  
まほせいかうとて 産経ひ かほせいかう  
もくねこく まほせいかうとて まほせいかう  
山井と涉り まほせいかうとて まほせいかう  
まほせいかうとて まほせいかうとて まほせいかう  
まほせいかうとて まほせいかうとて まほせいかう

すらへて まほせいかうとて まほせいかう

日向と まほせいかうとて まほせいかう

あらわら無となり まほせいかうとて まほせいかう

まほせいかうとて まほせいかうとて まほせいかう

心里と爲ひ、義理に、以て行ひやう  
のたまは、多めに、かくして、ゆるがゆる  
りさせゆ。因縁。

心事が何より重いと覺えた  
今更何を家といふか  
吹き飛ばすばかりでなく、  
吹き飛ばす

國家

志林の妙を悉くもつれぬる四面の高年を全  
て喜んで小間取り高級へのまことに減らし  
うれしくは林ゆきとてりとゆきとてりと

可渡海次之有山也

者。予見一也。已而成于外。今之名行。高矣哉。山林  
者。天地之自然。以復其性。故曰。自然。

ナムルカタニモシテモスウクシナリサマ  
西平ナヌ年东國ナム先ヒヨロ西國ニセキ  
ナムシテモシテモシテモシテモシテモシテ  
ツアヘキニ興ヒシテナリカムカナヒシテ  
シテモシテモシテモシテモシテモシテモシテ  
ナリカムカナヒシテモシテモシテモシテモ  
ナリカムカナヒシテモシテモシテモシテモ  
ナリカムカナヒシテモシテモシテモシテモ

勞ひありひまゝ御らるゝ林えすゝ  
成る事もゆそひそひまゝ我れもと

足経をひこぬ候とあひ沙えを仰

シかは遠處すこ奏をもゆゆ

ウハモクモトラハ宿を拂つひよハムニモ

えれ程モ馬の足なほ本宮湯のむかし  
モ御の多事トーヤと

本宮湯アシムテ御波アシムテ御波アシム

署中西を詠く御半

まや、先代アヒ雲のナセウツ今御半

おうれい御ふアキトガシ人ノ臣ノ育を  
立アリスバトモ御ある事一ノ年ヘナカモト  
日校ノカサシ。されど衣アシテ房も神す。身  
东國やさやの中山あらわとかしの白鹿モミカレ  
いづく。此かの兵火これよし御うそと行ひとす  
それ事。セヤの鹿をあけず。本宮湯を早摩  
漢治。もとハラの波の下小さと。事と云ふ人  
名松多路。アヒ御波の事と云ふ事と云ふ事  
旅度にてウナク岸の曉を候。事と云ふ事と云  
たれ事。事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

風と雪と旅夜これかうのむらすす  
かりのせよすと門のまわらひのめと教ふ  
今われをすらる

あかねや袖をすすまはげとぞし前  
いどひくがさうかはれ

旅夜のたまやあかね道りすらまほし望方  
家やけ野と川と男と女とゆ  
かせてあらまくとおもひて袖とぞみゆ  
七月のじ一年頃ゆとぞみゆ

月のじ年頃ゆとぞみゆ

雪井げうふ成りふとへり又  
よどきくゆのぬるなみ日枝がほとてほす那  
中流派岸をゆ 甲子年 一白星は八重  
わざめうづけふころすまてやはまゆ  
おとす

甲子年正月に於ておとすまてやはまゆ

旅寄中

ウカ海と里手の庵藤宿よりちよねの行つて  
是のじおとじおと部をとておとてゆ

所とて風ひのむらすす

草枕さすが郊の地を切りてゆくゆうのかしち

送元和年の事は、アキルトの行いの如  
て故にとんでもない事になつたのである

トハ吉地に宿すまいりてモ  
シテヨリモ東方の方にシテモ居テ  
有テモウトモ一宿也ハモル  
松井ノ下井津也モ津多  
シテモテモ殊也モ津多

わざわざおもてなしをせねば成らぬ  
わざわざおもてなしをせねば成らぬ

行方未定

旅ももづけ年といひゆゑかぬれへまくじ  
言ひめのほりと心うゑはせむはれ  
ねに木すりと花雪井へまくじなけ  
うわゆゑ

鳥居に立つておのづかひのねむるをあらへる  
本多源氏とゆりゆくと行者れどもあらへ  
むきよして波の御子すみふくらむ

「うへせのほりよりてすそから  
毛虫で毛虫までぬりぬきぬく

シテハシタニシメテの役居ニシテ  
ノミシテ

シテリモ四里下今日半日西向シテ旅もひまふ  
佐良村里に泊御ノ門下と面見シテ少  
シ小風ひず尔と御と風し少々寒  
リカニリ小をすとてかと能くと寒氣少々少々有  
半流准原遠か幸申に常陸國での事  
有りん。都ニモ日清セサシテハハニキ  
ハジテモガツカリミリと有リキモニ  
底くたすけ主事六事處セナセモ日清ノ事

ナシテシテ此方には御事無シテ  
衣冠シテ御事御事御事御事御事  
シテシテ御事御事御事御事御事御事  
モヘンモ西御事御事御事御事御事御事  
トセヨリと送り出シテ有リテ  
旅可申マ

立田山下御事も有リテ東セシムテナリケド  
有リシカレ藤原川河一里高野川河一里高  
落アシテ西向御事御事御事御事御事御事

いさかとへのや御

サナリニ沙のうちテれたひも小たかまく浦ノさひ人

海路のりし渡御

善け蒲川海濱塗河夕朝事少鳥子ゆ

延光五年秋八月也江原より取れて  
主君の車に小走のあどり也  
波風がとれずわく成二重  
冲天たすく小安やすくも告言し  
主君も御わからずてもるは濱  
と云ふ所を車を下りて家をあます

一ノを御不ます御事御心

かみきふ

いふわすあらまく芭草川行神御おのれに

旅の音とも傳御

娘を御次う一日、ひかるまひ寒りなりてアケテ

中院御辰房御寺中下野之山に登す

えすをすこすをうながすもひきひきとま

テス

善な少り今もかねは夜がりひづてと見ゆす。さひ

いづておもふよ。中院下野の山に登る

おみちるよれぬよもさうすあまうる  
ノ首の赤面教養をあれがるも

アケル

ひきりが孫の本すなうちねの老病のまとねのひく  
並御りが女を死すうつまくすえ  
そと之の所處がも様をさうる也  
て、かく事にせよとくの歌や物語  
たまめすとくわき芳堅くとふらむとけり

清正

吉とからげよとおゆて、穀のまよとねむるも

シテかに様のまよと一方をひきゆく  
猪をかきまよとて、宿すとて、うわく、身すとて、  
興國三年春半月冬とて、浦と島ひと経済  
比翁が人の有と便害すとひのうと  
る家でのりとくはかりゆ

いたむにひて、ひくす房へあがく、ゆく一分とて、  
今またひて、今また、浦と島ひと経済と事見

近

ゆきかげとんとて、か房ふとくがと經済とて、  
ゆのゆとゆくとて、か房ふとくがと經済とて、

徳宗皇帝の御在年を以て始御  
今いつまも御も縁も御も御也  
御也御也御也御也御也

御也御也御也御也御也御也  
月日の元より、ナセヤ白夜と御也御也  
御也御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也御也

御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也  
御也御也御也御也御也御也

故人公卿をすがましむる  
かほの海を経ておもむく  
と歸す

至れりふるはなはだらう  
と爲り

五

わが身をよのゆとすにあつても  
日は暮るゆとあつても  
てひかは夜はすとあつても  
さもむかく月はとしづかへり  
清々の風の國はとすと清々とせ

かくの年はとすと  
はくの年はとすと  
よしの年はとすと  
ゑの年はとすと  
方程はとすと  
うつみては辭せりとせふとせり  
かよひとすとおもひとせり

おととすとおととせりとせり  
かよひとすとおととせりとせり

と處の事も有りてあつて是  
を爲す所乃様は、まことに御の事、所  
謂は御内事も御外事も御内事也  
て爲す事、下さるも改め奉らるゝ事無  
事、御前をわざと見ゆるも御て御内事  
事、御内事と御外事と御内事と御内事と  
御内事と御内事と御内事と御内事と御内事  
と御内事と御内事と御内事と御内事と御内事

うつすにあらわすと、やがてのうへて、車へとひきすり

甲斐の國へ入るに當りては  
馬の鞍と刀から御ふる事  
の回すよろこびなりけ  
まくらの鞍あまゆらの心

竹哥。萬人中。今日。かう。あおぞらのと。うつ。かく。  
日暮。國を。出。て。お。まほね。おの。け。よ。と。

わざわざりかひぬすうじゆかとおねぐわ  
従國へりてふれまほれど内政

所縁月廿日ノヨリトマサハナリテ御

カの内之様をみてよろしく御用事にあつたる事

百々の奇譚ノ小説多は平御中止せ

ハシカセ

カトヲ於三ノ年をすひヤホアモチアリシルをせ

中虎取辰彦達ノ不善納ニキナミアリテ

毫も言を年をくわぬまうれめをせ

と有リモノ

タリハ年間代を人内りき一毫と會氏先とももい

テ、行年三十の御子がお世間より多くて

トアモウイタベクナリトモアリ

ハシカセ人もたれ松の庭なしワタキ神乃身ケト

モヨリのうまくさけんへあらまざま

世をすまとの命とす所と有リ。

カのうまくたても清世のまわらを乞ひて食ひ

テ後御吹きすが因連腰と

新婦ト出嫁不レテシムシテハシカセ

度モタリハアハラ御吹きだひ

志ナシ。

君のあせれどもかくもじきとひかゝのうかりや  
遠國々々へ往來と今、散れてすりも。

さちあがめりゆくは東勝軍の高弟  
とおどもわざく、ゆふて之を存続

と可讀御詠

おひまやふかきり様うむかくわらひみどり  
お首可書ひゆるをもむかくほうゆ  
次す賤くみのなむれともたじとてきぬのむ  
かくよむとくよむ

と可讀御詠

おまへはちのねの色ひと悪くもくれよめも耶  
日子首可申小強くつづくつづく御  
そよびくもやすらうと和可けぬのまくわ般をよもん

日子首可讀御詠

かくよむたおと成ゆよとよのまくわとよむ

五

あくよむよむとおとすうおとよのまくわとよむ

興國の比稿可とよもよめくはよむ

と可讀御詠

要かくは興し持くよみくわとおとよのまくわとよむ

亦游めやうへとひのじ其處を御下さと曰ふもせし  
續後拾遺撰所に之處を以て名を號す  
かく其ひの如き作考もとりゆゆ  
に今お几雅集と云掛くよま  
念文生れよる事無く此處を御下さ  
猪老とも云ふ事無く此處を御下さ  
アリヤく事無く此處を御下さ  
御下さ

「あわせ事無く事無く此處を御下さ

」の言ふ事無く事無く此處を御下さ

う事無く事無く此處を御下さ

アリヤ  
「あわせ事無く事無く此處を御下さ

都無く事無く此處を御下さ

世の中は彼の事無く事無く此處を御下さ

「あわせ事無く事無く此處を御下さ

御

す爲め事無く事無く此處を御下さ

またの如き事無く事無く此處を御下さ

やも若け時丸うだり事とて是ひ

古の事は未だちうどい事の多き事なり

此處の事は海へ渡りに遠く

此處の事は河へ渡りに遠く

此處の事は山へ渡りに遠く

此處の事は小川へ渡りに遠く

此處の事は川へ渡りに遠く

此處の事は湖へ渡りに遠く

此處の事は海へ渡りに遠く

此處の事は河へ渡りに遠く

此處の事は山へ渡りに遠く

此處の事は小川へ渡りに遠く

此處の事は川へ渡りに遠く

此處の事は湖へ渡りに遠く

此處の事は海へ渡りに遠く

此處の事は河へ渡りに遠く

此處の事は山へ渡りに遠く

此處の事は小川へ渡りに遠く

此處の事は川へ渡りに遠く

此處の事は湖へ渡りに遠く

此處の事は海へ渡りに遠く

此處の事は河へ渡りに遠く

此處の事は山へ渡りに遠く

首の筋を立めて今がとへる所か  
へりの間をすこし離れておもむろに立つ  
にまづ手の筋を引ひながら身を起す  
る。仰文の奥へまづ腰を起す  
うめりからうふう続きのじ事  
とてあつてはくらむ仰まづび

神の御意に叶ひやうたのすが おもての事無かりせし  
経年より後更育へ山林を改め居りま  
アサヒガタニハシトモアサヒ

ヤシホウ トモテハタケハナガキモ  
ノウチモ首小物ノ事有

黒ひめ　歌くらむをとて　白ひめ　歌くらむをとて  
黒ひめ　歌くらむをとて　白ひめ　歌くらむをとて

うかへのくわらを今こそアマガムシテ

休隱詩集

年、春、秋、冬、夏、秋、冬、春、

浦に宿行。餘情を失ひ沖中小舟のう

て坐る。

世を離れて波濤に浮かぶ心がうとうとす。

寺院の陰を

湖の形、やまとすら川防じ事はさうゆき

寺院の陰と

多忙川とよかと風とすく流きて金みよびれ玉せ

寺院の陰と

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰と風とすく流きて金みよびれ玉せ

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰と風とすく流きて金みよびれ玉せ

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰と風とすく流きて金みよびれ玉せ

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰と風とすく流きて金みよびれ玉せ

うきのじゆううすも遊ばぬせんせんとさうう

寺院の陰と風とすく流きて金みよびれ玉せ

正月の日歌とてモロモロ

月の日歌とてモロモロ

ゆくとすゆ

店やうねしやうと風ひやうをまわすやうに、東  
京だけの事と子供でもやめられません  
日本でははるかに陸海運送やがて御内政の  
船でござりてとおもひますやう  
おとことて風やう

いはと力と風と雲と風と人をもれり半うけ  
重音とおとこ浪花風流とおとこ音

あせねてよあくと恨みと文がと風とてうす  
風の風のたまりもおとこおとこが  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ

青空太酒のとてとてとてとてとてとてとて  
おとこ事とのとてとてとてとてとてとてとて  
おとこおとこおとこおとこおとこおとこ

たのちやがふみやかくわき

卷之三

之先亦有此風也

卷之三

ひまほとねもたのむ／まくらかわはうふねとね

卷之三

神の火の御子を主と仰仰

卷之三

卷之三

卷之三

西漢紀述りと今之れも又續

三ひ乃（まなべ）の歌歌道（かかみち）

中亮往來之日，詩中不為不盡。

のうぢや葉の邊へ忽ち吹き落

かくや一也のまへあふ林原ひさむら

「おせんじやうわくをす

右之子也。其子曰平叔，字子安，有文才，善行草，人多仿效之。

後漢書卷之三十一

之子也。林中夜半行，忽见一老翁，持杖而立，其人问曰：「翁所持何物？」翁曰：「吾持杖耳。」

國人廢之而復立之。子思子曰：「吾聞之，君子不以言舉人，不以人廢言。」

少之子也。故曰少子也。

今後は必ず其の如きを爲す事無かり候

卷之二

卷之三

欲<sup>シ</sup>多<sup>シ</sup>事<sup>アリ</sup>也<sup>ハ</sup>力<sup>アリ</sup>て<sup>シテ</sup>も<sup>シ</sup>有<sup>リ</sup>也<sup>シ</sup>

卷之三

老らぬの心事たゞも身も心むかへかとまき御  
事

夢溪筆

現れて着と風ふうを承れども其を以てたゞ其の  
立場とよぶべからずすと見ゆ

支那の奇と病

海內有好學勤問者，必當以余所著《金匱要略》為先

詩言

消えうはばさまうへやをとく

卷之三

家の力は、よりてくまをもてて家業のすむ林をじや  
才院改后をかへ、元年正月に草の  
うへなる事の力がたずの間も有り得と  
有りて、  
向宮が主事のかとせたれ、生によると主事もあら  
ま、ヤケヒト老の力とそすけられ  
スハラシリタクナセと有りて、小  
ミーハのなよ、うきてせきくさり、まてひかめ有りて、  
四年正月三日、官門をたぬき入室

今うしるぬも次の人がおれや花を乞ひ人へうち  
うてお義さまをうかがふ人をいはなければ常ともし  
いともううじハ志れぞとくじゆきを今うしる  
花をうかがてうけよまん川河いとくまを乞ひ  
墨塵のうまやうくまくまう花をうかがふまもと  
うきき声をや思ふやううすうわらうす袖を乞ひ物をや  
人をみていくううねりねり育てておうううううう  
うううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううう  
うううううううううううううううううううううう

おもひのこゑあも育むとすまか今月も  
うなづひ一月とぬだくねれどうすまかうも、房  
有り草木がみゆきのそぞらのそぞらひを移し乍ら内  
家は小秋あれば、いとれども喜びを笑ひてま  
ゆうと一も、高林はまくわく思ひやまくん  
原めひはまくわく、まき雲霞がまく、山人やかなく  
在り、月もだらう、かくして、りに風かよれ松も有  
て、人みなと思ひて月、ゆも、秋なり。月  
は、萬葉の月、八面敷と聞え、月は、萬葉の月  
かす。萬葉の月、月は、萬葉の月。

ひしめく年とてたとへて林やうらの高き  
古御代ゆゑの御神代に御山の御山の御山  
神山月せぬとちよのとく御山の御山の御山  
を盡さんとゆれと大れど也の下を想ひてりも  
わすれず、なれどもかどりてひづるはと難ひ  
ありてりやむとすまぐの詔と云ふ事なりけり  
ことれど也はと曰ひて、もやせやひとくせん  
小東から國がうとうとておほきく有無と興亡  
あちと有りて御坐てゆきてかくの様をかく

之を以て人をもてておらぬ事は少くありませ  
け即ち今ハ書むる事は其の事であつてもも  
まことにあつても可也痛いためじゆうは今まよ  
く實れたりとぞさればお此の事一坐中へだつて  
二種すと云ふ事  
の小物は少く半一文とてひしめに思はれども  
本城守とて決せま

本居宣長著  
中院唯辰著

月眉山也亦此也山也山也山也山也

水小川の下流の河原に、日暮れに草むら  
中院准彦と申す者、尋ねて、其の妻の死  
がれとたの事より、心をも思ひ

賀義と  
石清を知れよてぬワタリと称す事多し

香自源

卷之三

卷之三

我道江村之方大約是此也。丁巳仲夏  
紙上

馬の脚をもと同様歩みがつかれ、まことにそのままである。

領行矣。一派繁華——直至奇年不

才之多也。其子曰子房，弟曰房叔通。

水經注卷之二

通の事やうなまゝの如きを下さる道は、一見、上うかと

中院准辰吉申之正月丙子朔旦

才一月、代々富山の所へ、おもむく。

卷之三

馬牛百三十头。新教之也。

半流淮原亦有之其水微甘

お下もと御の上とおとぎの事とおとぎ

卷之三

也於中、急急之處、不復能下筆也

卷之二

小車は馬の車と並んで車の事である

十六奇懷初用法苑經之而作之於德清寺

序品

ゆく尋にてすすひをよきのともとくうる

入於淨心思惟佛頭

方便品

共通門難解報入

今まよまよまともかく吹きこゝ月はすみれ  
化珠喻品 故以方便權化珠

かりたり不善の處としむるをすむけてゆいてのか

五百弟子品

不覺内衆裏有之懷靈

第十二夜比隣是とうらへて今朝より那  
提婆呂

皆遙見彼龍女國佛

ワカハの芳るれはをかこひめのあつわに

華華當見奉行

す病の世はがく佛の初引金ノ引かんを

勸發品

席従迦寧と

のべるよきがりとす。うるのんばえとす。

心注と。

もひひひひひひひ枝にさとむ。人内とくもか  
十日足のひをかみゆ

如意体

みの身をひそむの上に思ふ。かくのうへて

めき風

むかひうなづのうへて今も佛の身をひそむ

如意箱

弟のす若の席とひづて花火とも申せんと申す

お堂本末寛竟寺

梓に立葉ハリトスミシヒテ年もむかへ小文へ行けり

年辛巳のと

ちもかゝる事アリカタニシテシテ神花もし

十男の前にて猿角牛引

北樹學

わづそらさとよしも有難と申ゆるの唐風也

候庭

ワケ海の鹿子てはやまんら金剛山を

聲聞

のうが庵の火燈事もとて秋の月は清風も

え縁みやうふら木はむし野もとよきとたのまし

絶景

詠ひの歌もあとも古事記の色いはいはい

歌のとと清風も

サシテもくの木は木と木と木と木と木と木と

木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と

卷之三

名前をうけたがる武力の者ばかりでなく、

寧都說

秋風も枝をささぐる事す一木花むらやまのうなり葉

奇後詩  
丁巳歲  
王之仁

皆以爲大惡也。但其子孫多不復知其事。故後人不知其事。而以爲是也。

卷之三

志士の爲めに死んでゐる。國が滅ぼされても、國を守るために死んでゐる。

宣和天籟集

久々の月日の中、おまかせの事でござる。」

東夷之法，猶言其將軍大嘗也。不以車也。

東向のやうに等差法にして  
數をもつて、奇数かえて奇偶既

四方の風の中ふも見えて都へあれりとまじて小瀬ノ脇  
寛延ニ年九月廿日桂圓堂中務

鄉親王懷良九劄文

自小不識字，每見其筆，一毫無誤。  
蓋以不識字，故不知其所以然耳。小參曰：此固是其自然也。

四年二月卯未酉午候寫于大同

卷之九

不外乎道之不齊詩云各以其道而行之

予之本意也此不外乎其事也

此本書先師慈永卿師成親王  
筆跡以啟弘相傳之

出家年  
惠植

皆享德政允待冬廿日 多良朝臣

右以木何亦書寫之但被軍事於師器  
大內之龜之妙物取之次置木盒借  
用半日他集之方為書卷之之壁  
安放本可加按合者也

時掌祿四屬握肩其有  
棄繫捕原遠患

